



# シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2017年4月30日

2017年春季号

## 本号の内容

- 春に語る
  - ・CSNは文系出身者とのコラボを
- 活動報告
  - ・第14期総会報告
  - ・第24回サロン報告
  - 坂川現地視察会
- 事業報告
  - ・IME取組み経過報告
  - うなぎの完全養殖研究会設立へ
- トピックス
  - ・気仙沼市派遣業務報告
  - ・新会員自己紹介
- コラム
  - ・CAFE0-34報告
- CSNの動き

## □ 春に語る □

## CSNは

## 文系出身者とのコラボを

理事 和久 昭正

### 1. なぜ文系出身者とのコラボか

CSNは、活動の趣旨としてシビルエンジニアの豊富な経験を生かし、NPO活動を行っていくことがHPに明記されている。すなわちCSNは土木技術者の集団である。

私はこのCSNの活性化のために、文系出身者に多く入会して頂き、土木

技術者とコラボレーションして活動を進めることを提案したい。

その理由は、土木事業は経済や社会問題と密接な関係があるからである。すなわち、土木事業の抱える色々な問題を解決するためには、経済や歴史・文化の知識を持った文系出身者の知恵を借りる必要がある。

例えば、インフラの維持管理問題で、最も大きな問題は、将来の維持管理費用をどのようにして確保するかである。これは、立派な経済問題である。

また、インフラ整備に関する優先順位決定問題がある。この判断はその地域の社会問題に直結する。

このようにインフラの維持管理問題は、経済や社会問題に造詣の深い文系出身者の知恵を必要とする問題であることが分かる。

### 2. CSNの現状

幸いCSNにはすでに高橋肇事務局長をはじめ



和久理事

とする文系出身者が数名おられ、活躍されている。

高橋事務局長には、先日、坂川ウォーキングを企画され、その歴史的背景や地域の生活や文化との関連を見事に解説して頂いた。

また私事で恐縮であるが、私自身もゼネコンのトンネル技術者であったが、その後名古屋工業大学に転身し、大学院では「インフラ経済論」を、教えていた。インフラ経済論は、社会資本施設への投資問題を金融工学の手法を使って解くというものである。なぜ金融工学が適用されるかであるが、インフラへの投資額は大きく、また長期間に渡るということで、金融問題との共通点が多く、そのために金融工学の手法が適用さ

れるようになったものである。

言い換えるとインフラの維持管理問題は、表向きは建設問題であるが、中身は経済問題の要素が多い。

### 3. 国の動き

国の動きに注目してみると、政府も将来的にインフラへの財源確保が大きな問題になるという考えの基に、国土交通省がインフラメンテ国民会議を立ち上げ、活動を始めている。

この国民会議には、地方自治体や民間団体が平成28年11月の発足当時は199団体であったのが、この3月には400団体にふくれあがっている。その団体の中には、各種メーカーや、保険等、金融関係の企業も参加している。

一方、総務省は、平成26年度から地方公共団体の公会計整備をはじめた。現在の公会計は単式簿記であるが、この方式では、将来の維持管理に要する費用の計上が出来ないということで、複式簿記への変換を進めるというものである。

### 4. まとめ

以上のように考えると我々CSNは建設系のNPOとして活動を行っているが、これからは土木技術者だけでなく、文系出身者も交えて活動していくことが必要になってくると考える。

そのためにも文系出身者のメンバーの増強を図っていくと、おもしろい展開が期待できるのではないだろうか。

以上

#### インフラメンテ国民会議の目的

- ① 革新的技術の発掘と社会実装
- ② 企業等の連携の促進
- ③ 地方自治体への支援
- ④ インフラメンテの理念の普及
- ⑤ インフラメンテへの市民参画の推進

## □ 活動報告 □



### 有償事業ゼロ、会員減少

…問題共有して、解決へ！

開催日時 2017年4月10日(月)15～16時

会場 オリピック記念青少年総合センター  
105号会議室

参加者 7名

CSNの第14期(平成29年度)総会が、正会員18名のうち16名(うち委任状10名)と協賛会員1名の参加で開催された。

辻田代表理事はあいさつで、「今期は比較的活発に活動が展開されたが、残念ながら有償事業の受託業務がゼロであった。今期は、繰越金で

凌ぐことが出来たが、このままでは来期は運転資金が底をつく。

また、会員も高齢化してきており退会する方があり、減少している。近い将来、法定の正会員数(10名)を割り込む可能性がある。

これらの対応が急務である。」と述べた。

目前に迫りつつある危機は、全会員が問題共有して乗り切るしかない。

つづいて審議に入り、審議事項は議案書通り承認された。



## 坂川逆流の謎に迫る現地視察会

報告者 事務局長 高橋 肇

日時 2017年3月29日(水)  
13:00~17:00 現地視察  
17:00~19:00 懇親会  
会場 松戸市(江戸川・坂川周辺、〔富吉〕)  
参加者 18名

今回のサロンは、サロン史上初のフィールドワークとなった。

松戸市街を流れる坂川と、その本川である江戸川の現地視察をおこなった。都民と千葉県民の飲用水となる江戸川を、支流坂川の汚染から守るプロジェクト「清流ルネッサンス坂川」を学ぶ企画である。

これを取り上げたCSNニュース2016年冬季号の巻頭言「下流から上流に流れる川の秘密」を

読んで、「現地を見たい」との要望が多く、いつものオリンピック記念センターの会議室を出て、ここ松戸に足を運ぶこととなった。

本サロンは、当初1月に予定されていたが、からっ風にさらされて川の見学はきつかりと、春に延期されたものである。

3月29日(水)13時松戸駅集合。気温13度微風、青空がひろがっている。絶好の散策日和になり、総勢18名おおいに喜ぶ。ただし、辻田代表は直前にギックリ腰に見舞われ、懇親会場待機となった。

まず、駅から10分ほどの料亭〔富吉〕に向かった。ここは、本日のテーマ「逆流する坂川」の畔にあり、江戸末期以来の老舗で水戸街道松戸宿の本陣跡に隣接している。

館内で、きょうの案内人である筆者が、テーマについて約1時間説明した。

ついで、市街地を複雑に流れる坂川沿いに、最初の目的地「古ヶ崎浄化施設」をめざす。

ここから、江戸川に出て、堤防上を下流の小山

可動堰へ約3キロ南下する。堤防からの視界は、江戸川以外にさえぎるものはなく、風景の3/4は空かと思える。

右岸には、金町の家並み越しにスカイツリーが望める。菜の花が風にそよいでいた。



16時すぎ、最終目的地「小山可動堰」に着く。坂川逆流の原因となるポイントは2か所あり、古ヶ崎浄化施設とこの可動堰である。

ここから見ると、古ヶ崎浄化施設に集められた坂川の水が、「ふれあい松戸川」を経て再び坂川に戻される様子がよくわかる。

しかも、坂川は堰で分けられ、なんとここで上流と下流に流れていくのだ。

しかし、清流を取り戻す大プロジェクトにより水質目標が達成されたいま、各所にある浄化施設は常時運転はしていない。残念ながら、この日も流れはほとんど見られなかった。



小山可動堰にて。この日は、上下分流は見られず、堰横に設けられた魚道に見入る。

浄化運転休止期間が長かったのだろうか、「思ったほど、水はきれいでないね」という意見もきかれた。

小山から、菜の花明りの夕暮れのなか、出発地に戻る。おおよそ5kmであったが、全員そろって現地踏破できたのは何よりである。

17時から、〔富吉〕のレストランで、懇親会。レストランにはグランドピアノがあり、筆者の地元の知人が「ようこそ松戸へ、歓迎の意をこめて」とピアニストを派遣してくれた。

思いもよらぬ生演奏付きの豪華会食となり、本日のハイライトは、逆流坂川よりこちらかなと思ってしまった。



奏者の松島奈穂さんは、松戸在住の東京音楽大学大学院生で、これから博士論文に着手するとのことである。

プログラム一曲ごとに、その紹介と演奏のねらいや思いについての説明があり、それにおじさんたちの遠慮ない質疑がからまって、ふつうの演奏会では味わえない楽しいひとときとなった。

今回のサロン開催にあたり、たくさんの方にご協力いただいた。松島さん、その紹介者の筆者知人（大谷照夫氏）、会場

の〔富吉〕の女将。

そして、「清流ルネッサンス」について、国交省の専門家にお会いできる機会をつくっていただいたことは、望外の喜びであった。

すこし長くなるが、いきさつを記しておきたい。

筆者は、「逆流坂川」の調査にあたり、手に入る資料はほとんど目を通したが、いくつか細かい疑問が残った。プロジェクトを担当した当事者にヒアリングしたかったが、2、30年前の話であり聞くことは出来なかった。また、このプロジェクトは、国・県・市・地元<sup>いまま</sup>にまたがっているのも、全体像を語れる人を見つけるのは難しかった。当時の松戸市の助役ならば・・・、とのご紹介もいただいたが、90歳をこえるご高齢だった。さらに、坂川の現状については、最後までわからなかった。

かって、「清流ルネッサンスのフォローアップ」というレポートを読んだ。参考資料のなかで、これが一番知りたいことが全部盛りされている

水田さんは水質調査係長として、数千億円を投じた坂川浄化プロジェクトの“現在”を見守る人だった。

2時間にわたって、質問に適切にお答えいただいた。資料もたくさん提供して下さった。とくに、複雑な坂川の流れを示す地図は、視察会用に市販地図をもとに苦勞して手作りしたが、これも一目瞭然の説明パンフをいただき実にありがたかった。

水田さんのご教示がなければ、本サロンは、過

頼りになる内容だった。執筆者は、水田 泰子：江戸川河川事務所 調査課となっている。

ことしに入って、舌間理事が江戸川河川事務所に勤務経験のある森田靖則氏を紹介して下さった。氏を通じて、現職の担当者に会わせて下さるという。

その人が、驚いたことに水田泰子さんだった。

3・4年前に、地元の月刊タウン誌に「めぐる水一みずうちさんの坂川レッスン」という記事が、1年間連載されたことがある。清流ルネッサンスに関する技術的な難しい内容を、わかりやすく、しかも詩情をも感じさせる文章だったので、すごい書き手だなと感心しながら読んだ記憶がある。

それも水田さんがお書きになったものだという。

坂川現地視察会を1ヵ月後にひかえた2月22日、森田さんが同行して下さって野田市にある役所に水田さんをお訪ねした。

坂川探究者にとって、雲の上かあこがれのような存在の方との面談が実現したのである。

去を語るばかりで現状を知らない凡庸な名所旧跡巡りに終わったに違いない。

水田さんは、河川事務所の広報も担当されていて、市民に身近な河川・坂川に興味を持ってもらい、住民の力で清流を保つ風土づくりに苦心されているようだった。NPOの活用も視野にあるようで、ならばわがCSNをステージとしてお使いください、とお伝えした。

森田氏、水田さんをはじめ、ご協力いただいたみなさまに、こころから感謝申し上げます。



松島奈穂さんとサロン参加者全員

## □ 事業報告 □

# 地方自治体インフラメンテ支援ビジネスモデル（IME）の実現めざして 取組み経過報告

国土交通省では、昨年 11 月にインフラメンテナンス国民会議を立ち上げました。当 NPO も国民会議に参加すると共に特定非営利活動法人シビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）も、インフラメンテナンス国民会議に設立趣旨に賛同し、設立準備段階から積極的な参画をして参りました。

このような経緯の中ですでに季刊誌 15 号（2016 年秋号）でご報告の通り CNCP アワード 2016 のベスト・アイデア部門において当 NPO がエントリーした「地方自治体のインフラの維持管理を支援する有限責任事業組合（IME）」が最優秀賞に選定されました。

そもそも本事業は当 NPO が企画提案し CNCP をプラットフォームとした「共創プラットフォーム

ム事業化研究会」で事業計画が立てられたもので、研究会の総意で当 NPO が代表してエントリーしたものです。

今後、本事業の具現化に向けて当 NPO は CNCP とも連携して取組みを進めて参ります。IME の設立に当たっては事前に下記の課題を解決することが必要となります。

- 市町村が IME のような支援を望んでいるか
- 市町村に委託として発注できる仕組みがあるか
- 市町村に予算措置が可能か

IME の設立には新たな市町村のインフラの維持管理の支援モデルとしての仕組みや制度としての位置づけが不可欠となります。

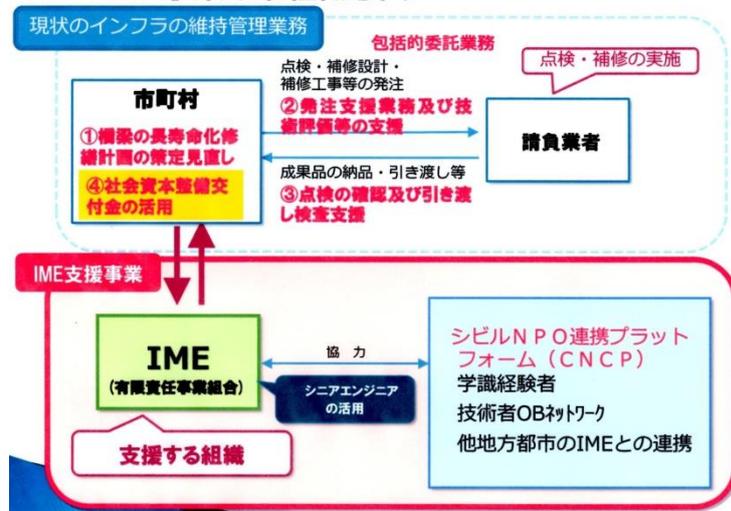
そこで、IME が今後の市町村のインフラの維持管理を支援するビジネスモデルの一つとして有効に機能する仕組みなのか。

また機能させるためには制度として何が必要なのかを検証する目的で、是非とも社会実験として取り上げて頂きたいことが必要と考え、その実現の可能性を内々に国土交通省に打診したところ、社会実験を民間からの提案で実施した事例はなく、ハードルは高いとの回答でした。

国民会議では、インフラメンテナンス市場を建設業界に限らず広く開放し異業種の参画を強く進めていくことを目指しており、今回の IME の実現に向けて広く異業種からの参加を求めて、まずは研究会を立ち上げるべく何社かに CSR としてのアプローチで働きかけを行って見ましたが、中々異業種の中にはインフラメンテナンスに関心を示す企業がなく、現時点ではほぼゼロ回答の状態です。

今後とも具現化に向けての取組みをして参ります。

## 2. IME事業の取組概念図



## シビルNPO連携プラットフォーム のシンクタンクチーム (CTT) 事業化推進第2弾

# 「うなぎの完全養殖 インフラ整備事業研究会」 設立へ

当NPOが加盟しているシビルNPO連携プラットフォーム(CNCP)では今年度より辻田代表が担当している事業化推進部門にCNCPの事業化専従組織としてCNCPシンクタンクチーム(CTT)が立ち上げられて活動を開始しました。

CTTでは、地方創生事業に取り組み、前号でご案内した第1号案件「南房総CCRC事業研究会」に続き第2号案件として「うなぎ完全養殖インフラ整備事業研究会」を設立することになりました。

我国の「うなぎの食文化」が近年危機に瀕していることは、既にご承知の通りであります。

2014年6月12日、「ニホンウナギ」が国際自然保護連合(IUCN)の定める「絶危惧種IB類(レッドリスト)」に掲載されました。

これは、「うなぎが食べられなくなる」のではなく、「いつまでも美味しいうなぎを食べ続けられるようにする」ためのシラスウナギの採捕規制や国際取引の制限、天然うなぎの生息環境の確保への活動なのです。また、昨年末の12月1日、NHK・TVのクローズアップ現代で『ウナギの稚魚取引

を巡る国際環境』の現状が放映されるなど、新聞やTVほかマスコミの注目度も高まっています。

今日、店頭で販売されている養殖うなぎは天然シラスウナギの稚魚を成魚に育てたものであり、卵からの完全養殖は未だ実現していません。

早急に人工種苗生産/稚魚育成技術を克服し、「完全養殖を実現する」ことが、ニホンウナギの保護と日本の食文化を守ることに繋がると考えられます。

ニホンウナギの完全養殖には、良質の水資源が不可欠とされ、養殖プールや浄化設備が必要であることから、中山間地にあつて規模の縮小や廃止が予定されている取水施設や水処理施設、廃校、プール、遊休地等のインフラの利活用が望ましく、そこで我々CNCPの支援が有効であると考え次第です。

実現にあたっては、計画立案、事業主体の設立、資金調達、適地の選定、用地取得、水利施設の整備運営など多くの局面が想定されます。それぞれの段階で異業種である水産研究所、大学、うなぎ料理店、飼料製造業、金融さらに地方公共団体

との連携・協力が必要となります。

そしてこれらの連携・協力の推進役には、公共事業実施に長い経験を有するCNCPが最適であると考えています。

CNCPシンクタンクチームは、こうした事業の進展に伴い埼玉県で「地方創生への貢献」を果たしたいと考えております。そこで、まずは基本構想を練り実施計画への骨子を固めるため、フェーズIでは戦略研究としてCNCPの会員、うなぎの研究者、県水産研究所、金融関係者等の少数のキーマンによる研究会の発足を進めております。



## □ トピックス □

## 東北大震災復興支援 — 気仙沼市派遣業務からの報告 —

会員 出崎 太郎

### はじめに

— 昨年4月から宮城復興局から気仙沼市に派遣され、東北大震災復興支援業務の任に就きました。

本年3月末でその任を終えましたので簡単にその報告をいたします。



### 65 歳を機に復興支援業務に応募

私は、65 歳になるのを機に前職を辞し、復興庁から日本技術士会に要請のあった復興支援業務に応募しました。仕組みは復興庁に経歴や希望赴任地を登録し、東北3県の被災市町村からのオファーを待って合意することにより採用になりま

す。

私の場合は、技術士建設部門の業務を主に経歴を作成し、任地はどこでもよいということで登録申請を行いました。日本技術士会にも同じものを添付して申請の報告をしております。

宮城復興局から、気仙沼市から派遣要請があったとの連絡を受け、こちらの意思の再確認がありました。承諾の意向を伝え、仙台で面接を受けました。その結果、採用内定の通知があり、決定に至りました。4月1日付の採用です。

### 気仙沼へ転居

前の住居を引払って気仙沼市へ転居することにしたので、前職の業務の引継ぎと引越しの準備に追われました。引越し業者の繁忙期に当たり、日程、費用とも大変な負担になりました。ちなみに復興庁からは赴任旅費は支給されますが、引越し費用までは支給されません。結局当面必要なものをだけを運んで気仙沼市に赴きました。

現地での住居は、気仙沼市が被災者用の仮設住

宅の空き部屋を用意してくれました。市役所まで歩いて通える場所にある仮設住宅です。この住宅は標高35mにあり、まだ余震の可能性を信じている自分には安眠のできる場所でした。

### 防災集団移転推進課に配属される

配属先は、建設部 防災集団移転推進課（以下、防集課）でした。被災者の移転地の宅地造成を行う部署です。職名は復興支援専門員。復興庁からの派遣者は皆この称号を使用します。新築前の宅地を引渡すまでの仕事で、建物は移転者が自分で建築します。土地は希望により、買取りと借地から選択できます。建物を借りて入居するケースは災害公営住宅課（以下、公営住宅課）という部署が担っています。復興支援の業務は防潮堤建設、産業復興支援、被災者のケア等多岐にわたっています。私の部署は住宅用地を整備し、公営住宅課と連携して被災者が早期に仮設住宅での生活から脱却し、自立してもらうことをねらいとしています。

### 宅造工事の開始

ひとつの現場が2~9宅地と、バブルのころ私が経験した数10ha規模の宅地造成と比べるとなくとも小規模なものでした。1宅地の規模は100坪（約330㎡）を標準としています。

気仙沼市は三陸のリアス海岸に位置します。小規模造成は被災者すべてを集めるだけの大きな平地が無いのと移転地のコミュニティを重視した結果と言えます。5現場とも工事発注はされていたものの本格的な工事はこれからでした。ちなみに防集事業の施工請負者はすべて大成建設、すべてが国費による工事です。

私が赴任したのは平成27年4月です。平成23年3月の大震災から4年が経過し、5年目を迎えていました。防集課の多くの現場は工事に着手され工事が進められていました。これまで工事に着手できなかったのはそれなりの理由があり、いわくつきの現場でした。未取得の用地が残っていたり、埋蔵文化財の発掘調査が必要だったり、工事用進入道路が無かったりです。

### 業務は多岐

業務の内容は、用地を手当てし、設計、行政手続きで法規制をクリア、工事の発注、施工管理、宅地の引渡しまでです。その間土地所有者、設計事務所、行政機関、建設業者、近隣居住者、移転者との交渉が必要となります。

防災集団移転促進事業の宅地造成には2タイプあります。1つは協議会型で、他は市誘導型。協議会型は、被災者が自分で土地を見つけてきて仲間を集め、必要な戸数を確保するもので、コミュニティを重視したもの。市誘導型は、市が土地を手当てし造成して希望者に抽選で引き渡します。協議会型では定期的に説明会を開いて、メンバーに事業の進捗状況や引渡し時期について報告することになります。

気仙沼市の防集事業は38地域63現場966宅地にわたります。それを20人ほどの防集課の人員で分担し、条件の整った現場から仕上げに行くこととなります。私に与えられたのは、協会型2地域5現場22宅地分でした。

### 支援担当者の頻繁な交代

この業務の特徴的なこととして、被災地の市町村には各自治体から復興支援の職員が派遣されています。その職員は、その自治体のプロパーのこともあるし、復興支援のために採用して派遣されている場合もあります。同じ職場にいても派遣元により勤務条件や待遇が違ってきます。プロパーの人は交代により、派遣採用の人は勤務条件の良い派遣先を求めて退職により業務が引き継がれます。そしてその多くの場合に十分な引継ぎが困難な状況が生じます。

私の場合は担当していた前任者が3月末で退職していました。引継ぎのファイルを残していかれたものの私の赴任とすれ違いで、ファイル情報だけではどうしても伝わらない部分が出てきます。交渉相手から、お前で担当者は4人目だ、どうなってるんだ、と言われました。

### 2年間で5現場22宅地を完成させる

結果的には2年間で2地域5現場22宅地全てを移転者に引渡すことができました。残ったの

は追加で発注した移転地までの道路整備や、地区外流末水路です。これは後任社に託しました。外周部分の工事が残ったのには、早期に建築工事に着手したいという移転者の要望にそって防集区域内宅地の整備を急ぎ、移転を優先させたということがあります。

この業務にあたっての私の見解をまとめてみました。

- ・被災地市町村の求めるのは最前線で働く即戦力の人材でした。日本技術士会への支援要請ということで技術経験に特化した役割を期待していたのですが、一担当者に過ぎませんでした。用地境界の立会から苦情処理まで一兵卒として働きました。

- ・最前線で市民と直接向き合うには困難が伴いました。それまでの経緯を知らないことや土地勘が無いことで多大の労力を費やしました。プロパーの職員と組み合わせるなど派遣職員の経験を活

かすための工夫が必要に思います。

- ・採用して派遣された職員は技術者のOBが多く、私より年配の方がめずらしくありませんでした。私を含めて事務処理能力が低下しています。PC能力においても若い人に劣ります。マネジメント業務と称して建設コンサルタントの補助員が付くのですが、市職員でなければできないことも多く、施工請負者への指示が遅れないように必死でした。

- ・土地がらみの業務は、境界立会や相続問題、用地交渉など複数の地権者との交渉が生じます。市からは複数での交渉を求められますが、相手の都合に合わせることも多く夜間での業務も発生します。一人で地権者に会うことも少なくありませんでした。記録も残さなければならず、職場へ戻ってから残業で業務を消化しました。(残業手当あり) → P11へ続く



・派遣職員の待遇格差が大きすぎます。

私の派遣元復興庁は1日当たり約14,000円で出勤日数分が月額報酬になります。普通作業員の公共単価より少額です。採用半年間は有給休暇が無く6ヶ月経過後に年間10日からの付与です。これは派遣元では宮城県からの派遣と並んで最低クラスの水準です。東京都、神奈川県、兵庫県などは月額報酬が高く、帰庁報告と称して公費で月に1回帰宅が許され、ほかに派遣手当もあります。

復興庁では派遣技術者の紹介を求めますが、これでは後輩を紹介する気になれません。

### 防集事業以外にも復興事業が残されており、 これからも支援が必要

このレポートでは自分の業務範囲の記述にとどめました。私自身貴重な体験をさせていただきましたが、気仙沼市では大震災で死者・行方不明者1,358人、住宅被災棟数15,815棟、被災世帯

数9,500世帯という多大な被害を受けています。

同じ職場でも家族を亡くされた方がおられました。防集事業以外にも復興事業が残されており、これからも支援を必要としています。支援を受けながら市単独で自立の体制を整え、一日も早く復興が実現できるよう望みます。



防災集団移転事業の一例（整備戸数6戸）

気仙沼市ホームページより

## 新会員自己紹介

### 柴田 正行さん

1949年、岐阜県多治見市生。実家は代々焼物作りでありました。「黒部の太陽」を見てトンネル屋に憧れ、名城大学工学部土木科に入学。73年ハザマに入社し、爾来40年、現場一筋にやってきました。



その間、1/3がトンネルで残りは都市土木を担当してきました。

さすがに現在は現場担当というわけには参らず、支店にて積算を担当して、たまに現場に出ています。

趣味は、実家の関係もあり、焼物です。

生涯1つだけ自分用の物を焼きたいということが希望です。どうか今後共、宜しくお引回しの程お願い申し上げます。

## □ コラム □

## CAFEO-34 (フィリピン大会) 参加報告

## —自然豊かな南の島から—

会員 出崎 太郎

昨年 11 月末、フィリピンで開催された CAFEO-34 に参加しました。

今回はフィリピン南西部のパラワン島で開催され、そのテーマは“ASEAN Community : Engineering Shining Through”でした。

フィリピンはドテルト新大統領になってから麻薬がらみの取締りが厳しくて国内の治安状況が不安視され、日本からの参加者にもその影響が現れました。日本からの若い技術者の参加が取り止められたのです。にもかかわらず、CAFEO は無事実施され、混乱無く終了しました。その一端を報告いたします。

CAFEO (Conference of ASEAN Federation of Engineering Organizations) は、非政府系組織による東南アジア技術者の交流大会で、構成 10 カ国が毎年持ち回りで開催しています。

日本はオブザーバーとして参加していますが、他に常連国のオーストラリア、韓国なども参加しています。私は日本技術士会の一員として 21 回大会から連続して参加しており、今会で 14 回目になります。参加者は、現地集合・現地解散で、自費での参加です。

CAFEO-34 は 11 月 21 日から 24 日までの

開催で、私は前後の休日を利用して 19 日(土)に成田から出国し 26 日(土)に帰国しました。現在、私は東日本大震災復興支援の仕事に従事していて、気仙沼市に住んでいます。関東にいた時と違い、出国前に 1 日を要してしまいます。パラワン島へは日本からの直行便が無く、首都マニラやセブシティから入ることができます。私はフィリピン航空で、マニラ経由で入りました。

フィリピンの南西部に位置しマレーシアのボルネオ島に近いパラワン島は、“最後の秘境”といわれるリゾート地で、手つかずの自然が残されている地域でもあり、世界最大、最長 (全長 8.2 km) 規模といわれる地下河川は 1999 年世界自然遺産に登録されています。

南北に細長い (全長約 650 km) この島に 80 以上の民族約 76 万人が住んで多様な言語が話され、島中央東部のプエルト・プリンセサが州都となっています。特に漁業が盛んで、フィリピン全漁獲量の約 65% を占めていると言われてい



パラワン島

(出典 [en.wikipedia.org](http://en.wikipedia.org))

世界自然遺産の地下河川

19日(土) 9:30に成田空港を立ち、マニラ経由で18:30その日のうちにパラワン島に着きました。今回は、昨年からの会に参加している日本技術士会の荒野技術士と一緒に。タクシーで予約してあるCAFEO会場の市内のホテルへ。ホテルは市街地のはずれにあり、30分ほどで着きました。

翌日は大会前のフリーの日だったのでこの島の観光にあてました。荒野さんと最大のお目当て地下河川の終日コースを申し込んだのですが、あいにく天候不順でツアーが取り止めとなっており、やむなく午後からの市内観光に切り替えました。600ペソ。午前中は市場を覗くこととし、荒野さんを誘って出かけました。



魚

毎度のことですが市場は街中で必ず見ておきたい場所になっています。トライシクルを利用し、市場まで二人で40ペソ。プエルト・プリンセサの市場は、特産の海産物を中心にいろいろなものが並べられていました。

米の量り  
売り

紫色の卵

今回のCAFEO公式行事は、21日(月)の各種ワーキンググループ、夕方の歓迎パーティから23日(水)夜のさよならパーティを経て翌日のテクニカルツアーまでです。

歓迎パーティでは、顔なじみの参加者と再会を喜び、日本からの参加者とも初めて顔を合わせます。

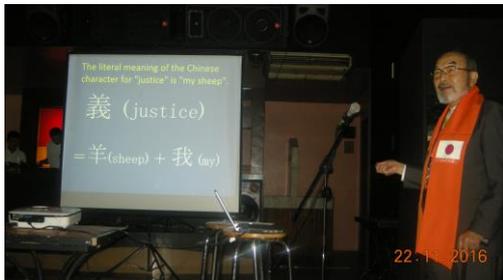
このとき若い技術者が日本から参加していないことを知りました。この国の危険度レベル2ということで日本技術士会から自粛要請があり、参加を見送ったということです。これまで13年間継続してきて昨年一挙に18名まで増えたのに残念でした。日本からの参加は総勢5名であることを確認しました。

ここでは主催者のスピーチのほかフィリピンの料理や民族舞踊、バンド演奏での歓迎を受けました。イスラム教国への配慮のためノンアルコールのパーティでした。

22日(火)午前中にオープンセレモニー、CAFEO構成国による年次活動報告が行われ、

午後から本格的なConferenceが開始されました。テクニカルセミナーで日本から参加の技術士二人、本間勝氏が“Mission of the Engineer ~Rational and Scientific Thinking~”、荒野てつ也氏が“What is Carbon dioxide Capture Storage (CCS) Technology? It's a Key Technology for Global Warming Problem”をテーマにプレゼンを行いました。

ワーキング  
グループ歓迎  
パーティ

オープンセ  
レモニー本間氏の  
プレゼン

23日（水）夜には恒例のさよならパーティが開かれ、クローリングセレモニーが行われて次回開催国タイに引き継がれました。参加者はナショナルドレスでの参加と国別にステージでのパフォーマンスが求められます。

日本チームは昨年同様メンバーの一人が空手で板割りを披露しました。

CAFEOでは組織委AFEOやFEIAP（Federation of Engineering Organizations in Asia and the Pacific）のミーティングも同時に行われるようになっていきます。

FEIAPは、アジア太平洋地域のエコノミー（国あるいは地域といった単一経済体）にある技術士会（日本においては日本技術士会）の集合体です。ASEAN諸国が中心となり、その周辺エコノミーである日本、韓国、台湾、中国、オーストラリアなどを含んでいます。

最近はナイジェリアなどアフリカ方面のエコノミーも参加するようになってきているとのことです。

さよならパーティでインド代表の人たちと同席したり、テクニカルツアーで台湾代表と行動を共にしたりするようになりました。

ASEANでは一昨年末、加盟する10カ国が域内の貿易自由化や市場統合などを通じて成長加速を目指す広域経済連携の枠組み「ASEAN 経済共同体（AEC）」が発足しました。投資、人の流れ

を自由化し、関税を撤廃して域内の自由貿易圏実現を目指しています。

今回、日本技術士会の青年組織から若い技術者のプログラム YEAFEO への参加はありませんでしたが、また次回からの参加を期待したいと思います。以上



インドからの参加者

AEC の  
10 国

若い技術者たち

## CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	2/6、3/6、4/3	辻田、宇佐、高橋
シビルNPO連携プラットフォーム運営会議	2/14、3/14、4/11	辻田
第24回サロン	3/29	18名
第14期総会	4/10	17名（委任状10名）
活動報告季刊誌第17号発行	4/30	

## 編集後記

- 本号に、出崎会員から2本寄稿していただいた。そのうち、震災復興集団移転宅造の報告は、昨年春季号掲載の星野会員の放射性廃棄物処理報告と並んで、一生記憶に留めておきたいと思った。
- 出崎会員は、復興支援業務終了をもって、出身地の北海道に帰郷されるとのことである。長年活動を共にした仲間が去ることはさびしいが、逆に北海道にCSネットワークが展開すると思えば、先が楽しみになってくる。  
出崎さん、いままでありがとうございました。  
健康に留意され、益々のご活躍をお祈り申し上げます。
- 柏市の「あけぼの山農業公園」のチューリップが満開と聞いて出かけてみた。  
甲羅干し中の亀が、気持ちよさそうにうつらうつらしていた。  
まさに、水ぬるむとは、このことだと思った。

(事務局：高橋 肇)

